

欲張りな学校

校長 山田 浩之

長年学校教員を続けてきて、つくづく学校は欲張りだと思っています。子どもに学んでほしいと願っていることが、本当にたくさんあります。

学校が目指す学びとして文部科学省も新潟市教育委員会も、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を示しています。新潟小学校の教職員もその大切さを同じようにとらえているので、今年度の校内研修テーマを「自ら考え、協働する子ども」として進めています。学習意欲の高い子どもが多い新潟小学校ですが、友達と協働して新しい考えを創り出していく姿が十分かというところと、もつと経験を積んでほしいと考えたからです。

先日行われた算数の研究授業でのことです。ニンジンの絵を掛け算の式に表すという二年生の学習です。まず、ニンジンが八本あって、皿も四皿ある絵を「 2×4 」と表すことを確認しました。その上で十二本のニンジンがバラバラで皿もかかれていない絵を見せました。絵を見せると、一斉に「分からない」という言葉が上がります。ここからが協働していく場面です。子どもの対話が続く、「かたまりが何個あるか分からないから式にできない」「まとめることができないから……」

と話していくうちに、子どもは、絵の中でかたまりを作った式にしていけばよいという見通しをもつことができました。教室の中で、子どもがリーダーのように言葉をつないでいくことで学ぶべき課題が作り上げられました。

自ら考える道筋を見つけていくことの大切さを説いた言葉に最近触れました。それは、自力で解く前に解法を知ると「それはもう解けない問題になってしまう」というものです。著名な数学者である岡潔の言葉です。最短距離で正解や解き方を教えてもらうと、その問題を自らの力で解き進む経験はできないことになってしまおうという意味です。当然、経験できたはずの喜びも得られないことになります。欲張りな学校では、子ども自らが、協働して学ぶことを大切にしています。ですから、少し遠回りでも対話させ、自ら正解にたどり着く過程を大切にしています。そうすることで、学ぶ楽しさや充実感を感じさせることができます。また、そのようにして得た知識は長い時間定着するとともに、その後の学びや生活に活用される生きた知識になります。